

# 就学後教育における総合的な学び

## －幼児期の教育から小学校教育につながるために－

### Comprehensive Learning after Preschool Education －To Connect from Early Childhood Education to Elementary School Education－

兼平 友子

Tomoko KANEHIRA

青森中央短期大学幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words：主体的・対話的な学び 総合的な学び 合科的授業 保幼小連携

#### 1. はじめに

幼児教育から小学校教育へ連続したものとなるように、今回の指導要領の改定で幼稚園教育要領と学習指導要領とつながりが持たれるようになった。幼児期に育ってほしい姿として3つの柱「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」が示され、それがそのまま小学校教育の各教科においての身に付けたい能力とされたのである。

幼児期で遊びから総合的に学んできた子どもたちが、あまり抵抗を感じずに小学校以降の学びへ入り込んでいくためには、子ども主体、子どもの興味関心・自発性を重視する幼児教育の方法をベースとした教育法を、小学校以降も継続されなければならないのではないかと思う。

加えて、今回の小学校学習指導要領では「主体的・対話的な深い学び」を追求するよう、アクティブ・ラーニング的な授業の必要性も示されている。

そこで、本研究では総合的な学びとは本質的にどうあるべきかを考察するため、「主体的・対話的な学び」に注目して検討していく。特に今回は、幼児教育で子ども同士、子どもと保育者、保育者同士の「対話」を大切にしているイタリアのレッジョ・エミリア保育と、学校だけでなく家庭でも子どもとの「対話」を重視し、合科的な授業を展開しているフィンランドの教育を追求し、我が国で総合的・合科的な授業を展開するにはどうしたら良いのかを探っていく。

#### 2. レッジョ・エミリア保育

イタリアのレッジョ・エミリア保育では、徹底的に子どもの主体性を重視した保育を行っている。レッジョ・エミリア保育の基本概念にある「共同性」「プロジェクト」とは、保育者同士の共同もし

くは、子どもと保育者の共同、グループでの学びにより考え方の交流をはかることを重視する保育方法である。全ての保育を保育者と子どもが一緒に作り上げていくことを基本としている。いわゆる協働的な保育といえる。レッジョ・エミリア保育では、保育がどのような方向に進んで行くのか、どのような活動を行うのかなど、あらかじめ決まっていない。なぜなら、大人と子どもがお互いに学び合うという基本的な姿勢があるので、学びは保育者と子どもの相互・共同で形づくられていくからである。そのために大切にしていることは、保育者と子ども、あるいは子ども同士の「対話」である。保育者は、子どもたち同士がどんなことにもディスカッションを重ね、活動に広がりを持てるよう援助を行う。保育者の役割は、子どもたちが自分の思いを話せるように、また考えを深められるように適切な質問を行いながらディスカッションの手助けを行うことである。保育者は常に子どもたちのアイディアを中心に保育が行えるよう、ディスカッションの記録を取り検討する。そこから子どもたちが知りたいことや、子どもたちの考え、疑問などを検討する。保育者は子どもたちが自分たちで疑問を解決したり、仮説を確かめたりできるよう援助をするのである。子ども主体の保育を行うため、保育者は日頃から子どもたちの様子を細かく観察することが大事であり、それを記録している。子どもたちの何気ないつぶやきや会話を大切に、そこからプロジェクトを導いていく、というのがレッジョ・エミリア保育である。

以上のことから、レッジョ・エミリア保育は、子ども同士はもちろん、子どもと保育者、保育者同士も協働に考え一緒に遊びをつくり上げていく保育である。ここには保育者からの教えという考え方はない。「育てる」保育から「育つ」保育へ<sup>1)</sup>という意識が保育者の中にはある。チームとして、対話を大切にしながら一緒に保育をつくり上げている。そのためには、保育者は、日頃から子どもたちの会話や関わりに、注意深く目を向けることが欠かせない。子どもから発せられる言葉や思いを大事にした、子ども主体の保育をつくり上げていくために、保育者は子どもと一緒に学ぼうとし、可能性を信じ、援助や環境の工夫を行っていく。角尾氏が言っているように、主体的・対話的な学びが得られる保育とは、保育者と子ども、子ども同士がコミュニケーションをとりながら協働的に力を合わせて学んでく保育なのである。

### 3. フィンランドの教育

前章では、幼児期の教育における主体的・対話的な保育の様子を述べた。これを踏まえ、幼児期からつながる小学校以降の教育でも主体的・対話的な教育を行うにはどのようにすべきだろうか。ここでは、「対話」を大切に、自分で考えることに重点を置いた教育で、合科的な授業を行っているフィンランドの教育をみていくこととする。

フィンランドでは、「教科横断的・合科的な授業は以前から行われていた」<sup>2)</sup>ようである。

フィンランドの小学校での教育は、「「どのように学ぶか」に重点が置かれ、多面的な読解力が養われるようにしている」<sup>3)</sup>という。読解力を養うには、「読むことのほかに、見ること、聞くことが大事である。読解には、比較、解釈、熟考、評価という意味があり、それらの考えを表現する総合的な言語力が必要」<sup>4)</sup>とフィンランドでは考えられている。そのため、徹底的に子どもたちが自分たちで考えて解決に至るように教育する。藤田が「フィンランドの子どもたちの優れているところは、コミュニケーション能力の高さである」<sup>5)</sup>と述べている。それには、子どもたちは幼いころから常に

親、先生と「対話」を繰り返し行っているからのようである。この対話で培われるコミュニケーション力が学力に結び付いているものと考えられる。

小学校では、学習の方法も子どもたちが決める。テーマ学習が基本で、そのために、興味の湧くテーマ設定が重要のようである。教科書には絵や写真、図が多く、写真から見えることや読み取れることなどを、書いたり話したりすることが多く取り入れられている。子どもたちはテーマについて調べたり、話し合ったりして課題解決に向かう。子ども同士グループ学習をしながらコミュニケーションを深めていき、自分の考えを話す、書くなどで考えを表現することを繰り返し、課題解決に向かっていく。北川は「日本においては、教科書にはいろいろな表現活動が埋め込まれているにもかかわらず、時間がかかり過ぎるなどの理由をつけて軽視される傾向が見られる」<sup>6)</sup>と述べている。また全員が成長していくことを考えて、フィンランドでは個別に指導することも欠かさず、個に焦点をあてた学習のスタイルをとっている。興味深いのは、一つの授業の中に複数の教科が取り入れられているところである。国語であっても、算数や理科、社会、図工、音楽とたくさんの教科の要素が盛り込まれるものとなるよう、授業の構成をする。また、テーマ設定も、実際の生活に合わせて考えられるように工夫されており、子どもたちは他教科同士のつながり、自分たちの生活とのつながりを感じながら、自分たちの興味関心に基づいて学習をすることができる。

フィンランドのすべての授業の中で大切にしていることは、先生から投げかけられる質問「なぜ？」である。一つの問いに対する答えが出ると、それで終わりではなく、「なぜ、そのような答えになったのか、なぜ、そう思ったのか」理由付けを必ず行う。その理由付けも3つ以上考えるという。そうすることで、思い付きで答えるのではなく、物事をきちんと根拠立てて考えることができるようになると思われる。フィンランドではこの「なぜ？」を大事にした教育が行われている。

『フィンランド国語教科書小学5年生用』を見ると、写真や絵が多く、国語的な問題以外にも関連のある理科や算数、社会などに関連する質問が記載されている。例えば、「説明文を読もう」という単元で、天気予報についての文章が書かれているが、質問は天気という言葉の意味についてや、説明文の構成に関することの記載の他に、今日の天気についての説明をしたり、自分の住んでいる地域の天気予報を書き留めたり、自分が気象予報士になって明日の天気予報を発表するという課題がつづられている。単に説明文を読み解くだけではなく、この場合は気象についての知識や住んでいる所の地域性等についても知識を得なければならないし、それを分かりやすく簡潔に伝える文を考え文章化するところまで要求されている。このように、一つの単元の中で合科的な授業が展開されていることが分かる。

フィンランドの教育と日本の教育の大きく違うところは、問題に対して答えを出す・知識を得るだけにとどまらず、得た知識を使って実生活と結び付けながら、自分の考えを表現するところである。それには、これまでの教育システムの違いや教師間での意識の違いも影響してくるのではないだろうか。北川が「日本は教科書に記載されている全単元の授業をきちんと全て実施しなければならないが、フィンランドでは指導要領の目標達成を目指して、個々の教師が複数の教科書から題材を設定し選択、実施する」<sup>7)</sup>と述べていることから、指導計画を立てて授業を行う習慣のないフィンランド教育との違いが見えてくる。

## 4. 学習指導要領から見える学習体系

### 1) 学習指導要領の改訂の経緯

小学校学習指導要領の今回の改訂には、これからの時代に必要となる資質・能力を育成するという思いが込められているという。ここでいわれているこれからの時代に必要な資質・能力とは、「社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、社会や世界に向き合い関わり合い、人生を切りひらいていくために求められる資質・能力」<sup>8)</sup>「地域に人的・物的なものを活用しながら身につけていく能力」<sup>9)</sup>のことを指している。ゆえに、今回の指導要領では「より良い社会を創るために、社会と連携し、協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む、社会に開かれた教育課程」<sup>10)</sup>を目標に改訂された。

こうなった経緯は、前回の指導要領改訂において、ゆとり教育を廃止し、知識技能の習得と共に、思考力・判断力・表現力を身に付け探究することが、「生きる力」につながるとしたことがあげられている。成果として、子どもたちの学力は向上されてきたものの、学びと生活及び人生とのつながりが実感しにくく実際の社会生活に生かせていないといった現状から改訂に至った。また、情報があふれる中で、視覚と言葉の結びつきがつきにくく、読解力が向上しないことや、生命や自然の大切さの理解が乏しいこと、多様な人と協働して生活を送るための規範・道徳心が乏しいことなども挙げられている。

これらのことから考えると、現在の子どもたちが身に付けなければならない能力は、学校で学んだことを実生活に応用し、または実生活から疑問に思うことや追求したいことを見つけ、それに向かって粘り強く自ら進んでいく力だといえる。

### 2) 今回の学習指導要領の重点事項

今回の学習指導要領における改訂された内容として、各教科それぞれで育むべき能力として「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性」という3つの柱が明確に示された。これは、すでに試行されている幼稚園教育要領でも幼児期に育みたい資質・能力として同じ3つの柱が示されており、幼児期からの連続した教育を意識したものとなっている。

さらに、「主体的・対話的な深い学び」を追求することも示されている。これまでは何を学ぶかという学ぶ内容に重点が置かれてきたが、今はそれに加えて「どのように学ぶか」という学習形態も重視されるようになった。それは、一斉指導の授業からアクティブ・ラーニング的な授業へと学習形態も変化させる、という授業改善の必要性を表している。それには、子どもたち同士が協働し合い、共に考え、共に学び、新しい考えや発見が生まれる、また見通しをもって粘り強く取り組む力が身に付く授業が目指されている。つまり、一つ一つの知識がつながり、「わかった」「おもしろい」と思える授業展開が求められている。そのためには、複数教科が連携を図りながら行う、教科横断型や総合的な授業実践を行うようにすること、そのためには教師同士の連携も重要であること、などのカリキュラムマネジメントも実施されることとなった。他には、特別な教科として道徳が教科となったこと、外国語学習、プログラミング学習の導入がある。

### 3) これからの授業づくり

先の改訂の経緯、改訂における重点事項を考えると、これからは授業改善の工夫が求められる。

「主体的・対話的で深い学び」ができる授業を行うには、子どもたちの自主的・自発性を中心に学びを進めていかなければならない。そのためには、子どもたちの意欲を掻き立てる動機付けの質が大事であり、授業の工夫も問われてくるところといえる。子どもたちが意欲をもって学習に取り組むには、子どもたちがすでに経験・学習してきたことの活動を取り入れ、考えるきっかけを作ったり、体験的な活動、感動する体験、興味関心の持つような環境づくり、疑問を持つような発問・環境づくりや、対話的な活動等が授業の中に欠かせない。子どもの目線に立ち返り、意欲を掻き立てる創意工夫が、子どもたちにとっての「わかる・できる」授業につながる。そのためには、体験的、対話的、興味・関心、疑問を中心とした学習方法で授業を展開し、個々に目を向けた丁寧な指導の工夫が求められる。子ども一人ひとりが「わかる・できる」を体験できることが自信へとつながっていく。

「わかる」授業となるためには、教師が子ども理解のための最善の環境設定が必要となる。それには、プロジェクト型保育を行う保育者と同じように、子どもたちのつぶやきや会話等に耳を傾け、疑問・なぜ？と一緒に考えて解決に向かおうとする教師の姿勢が大事である。そのためには、日頃から子どもたちを適切に観察する眼が教師には必要であり、子どもとの「対話」も欠かせない。教師は授業の在り方を「教える」から「共に考える」在り方にシフトし、自分も一緒に楽しめ、学ぼうとする意識のもと、子どもと教師あるいは子どもたち同士共に意見を出し合いながら授業づくりに努めていかなければならない。

このように考えていくと、「主体的・対話的で深い学び」ができる授業とは、これまでのような学習指導内容に沿った、教師が計画を立てて行う授業ではないことが分かる。しかし、子どもの主体性・対話を大事にした授業を行うとすると、おそらくこれまでのように、教師が計画してきた方向に向かって学習が進んでいくとは限らないことが多いだろうとも予測できる。

例えば、小学校1年生国語の「（ようすをおもいうかべてよみましょう。）お手がみ」という単元で考えてみる。（「小学校1年生国語教科書（下）」教育出版）この話は、自分にはお手紙を出してくれる友達がいないと思っているガマガエルのがまくんが、いつか誰かが出してくれるかもしれないと思い、毎日郵便受けを見つめて手紙を待っている。しかし、手紙が届かずがっかりする日々を送っている。そのことを友人のかえるくんが知り、かえるくんががまくんにお手紙を書き、二人で手紙が届くのを待っている、という物語である。この単元は、これまでの学習法であれば、「様子を思い浮かべて読みましょう」ということが目的の単元なので、登場人物の気持ちの読み取りが重視となる。しかし、子ども主体を重視する対話的な授業を展開しようとする、これだけではなく他に次のような授業の展開の仕方が考えられる。まず、登場人物はカエル、ガマガエルなので、もしかしたら、カエルの生態について興味が湧くかもしれない。また、挿絵から読み取れる季節や、この話のモデルになっている国について調べていくこともできる。また、手紙の書き方について、郵便屋のカタツムリが四日かけて手紙を届けたことから、がまくんとかえるくんの家の距離やカタツムリの歩く速度なども考えていくこともできるだろう。その他にも、授業を展開していくための切り口が、多方向からあるはずである。このように、一つの単元の中で、社会科や理科、算数など複数教科の要素について興味を示し、一つの科目から多岐に渡って学ぶことができる。こう考えると、教科横断的なカリキュラ

ムを新たに作るようなことをしなくても、日常生活と合わせて考えることもでき、さらにそれが自然と合科的な学習となるのではないだろうか。しかし、このように授業を展開するには、現在の我が国のように一人の教師だけで授業を行えるものではなく、複数の教師で授業を展開していくことになるだろう。加えて、一人ひとりの教師にも総合的な知識が求められる。もう一つ生じてくるのは、指導計画を立てることがこれまでに比べて難しくなる、ということである。ある一つの単元から、子どもたちが興味を持ちそうなことを予測し、それぞれの方向性を考えていかなければならない教育の方法は、教科書の単元すべてをきちんと実施するよう、教師が綿密に計画を立てて実施してきた教育とは相反するものであるため、先生方にも受け入れ難いものとなるだろう。しかし、幼児期の教育からのつながりを重視した教育をしていくためには、子ども主体に基づく教育を継続していく必要があり、先のような合科的な授業へと移行していかなければならないと考える。

現在、総合的な学びに向けての教科横断的な授業は、いくつかの学校で展開されてきている。そのどれもが一つの教科にとらわれず、他教科とのつながりを考えるように構成されていることは、十分に感じられる。しかし、そのほとんどは、A教科のB単元にC教科と合わせて行いましょう、というように子どもの興味・関心から計画されているというよりも、教師側の思いや考えから計画されているように思えるのである。中には、指導の事例などもあげられているものもあり（それは一つの例として参考程度としての位置づけであれば良いのだが）、これまでの総合的な学習の時間の取り扱いのように、ほとんどのところで実践事例通りの同じような授業が行われてしまう可能性も考えられる。これからは、学習指導要領の内容に向けて、それぞれの教師が抱える子ども達一人ひとりに合わせた授業づくりが行われなければならない。そのためには、子ども達と向き合い、子ども達が「分かる」「学ぶことは楽しい」「考えたことを表現するのが楽しい」と感じる授業づくりに努めていくことが大事であると考え。それには、マニュアル化された通りの授業づくりではなく、目の前の子どもたちに合わせた授業展開がなされるような、教師側の力量が求められてくるといえる。

## 5. おわりに

今回述べてきたとおり、対話を重視した学びは、子どもの意欲を掻き立てることにつながるといえる。子どもの意欲・自発性を常に意識した授業を展開するためには、教師からの適切な質問がカギとなる。子どもたちが自分の思いを話せるような、自分の考えを深められるような質問＝動機付けが、授業を展開する上で重要である。

子どもの意欲・自発性を重視した授業とは、教科の枠にとらわれることなく子どもたちの疑問に持ったこと、興味を持ったことに、教師も一緒に追求していこうとすることで成立する。これは、教科としてありながら、教科の枠を超えた総合的な授業の形といえるのではないだろうか。レッジョ・エミリア保育のように、「育てる」保育から「育つ」保育へという意識を持ち、小学校以降の教育でも、教師は「育てる」側だけでなく、「共に育つ」ことを念頭に置き、実践に努めていく必要があるように思う。学習指導要領に示された「主体的・対話的な深い学び」を追求する授業とは、学びを総合的な学びとして捉え、子ども主体の授業展開となるよう、教師が支える、援助するに徹底した授業なのではないだろうか。しかし、この子ども主体の授業を実践していくためには、これからまだ見直していかなければならない課題がいくつかあるので、今後の課題とする。

今回は、我が国で総合的、合科的な授業を展開するには、どうすべきかについて述べてきたが、具体的な内容までには至らなかった。これからの展望として、実際に小学校で合科的な授業を行っていき、その効果を考えていきたい。

## ○引用文献

- (1) 角尾和子編著『プロジェクト型保育の実践研究 協働的学びを実現するために』2頁、北大路書房、2013年
- (2) 北川達夫、中川一史、中橋雄編著『フィンランドの教育 教育システム・教師・学校・授業・メディア教育から読み解く』39,127頁、フォーラム・A、2016年
- (3) 同上、34頁
- (4) 同上、132頁
- (5) 藤田りか子著『知識ゼロからのフィンランド教育』27頁、幻冬舎、2009年
- (6) 北川達夫、中川一史、中橋雄編著『フィンランドの教育 教育システム・教師・学校・授業・メディア教育から読み解く』112頁、フォーラム・A、2016年
- (7) 同上、125頁
- (8) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）補足資料「新学習指導要領案 前文」』
- (9) 同上
- (10) 同上

## ○主要参考文献（註で取り上げたものを除く）

- ・文部科学省『小学校 学習指導要領（平成29年）』東洋館出版社、2018年
- ・文部科学省『小学校 学習指導要領解説 総則編（平成29年）』東洋館出版社、2018年
- ・J. ヘンドリック編著 石垣恵美子・玉置哲淳監訳『レッジョ・エミリア 保育実践入門』北大路書房、2012年
- ・佐藤学監修、ワタリウム美術館編『驚くべき学びの世界 -レッジョ・エミリアの幼児教育-』東京カレンダー株式会社、2013年
- ・ジェフ・フォン カルク著 辻井正監修『ピラミッドメソッド保育カリキュラム全集 ピラミッドブック基礎編』子どもと育ち研究所、2011年
- ・時事通信出版局『小学校 新学習指導要領 新旧対照本』株式会社時事通信出版局、2017年
- ・木村吉彦著『幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科の教科特性とスタートカリキュラム』上越教育大学内附属小学校内高田教育研究会『教育創造 vol.169』
- ・辻井正著『アクティブ・ラーニング プロジェクト法～自ら考える生きる力の基礎を身につける～』株式会社オクターブ、2016年
- ・島田教明・辻井正共編著『21世紀の保育モデル－オランダ・北欧 幼児教育に学ぶ－』株式会社オクターブ、2009年
- ・福田誠治著『競争やめたら世界一 フィンランド教育の成功』朝日新聞出版、2008年

- ・小林朝夫『子どもの「頭のよさ」を引き出す フィンランド式教育法』青春出版社、2010年
- ・岩竹美加子『フィンランドの教育はなぜ世界一なのか』新潮新書、2019年
- ・メルヴィ・バレ、マルック・トッリネン、リトバ・コスキパー著、北川達夫&フィンランド・メソッド普及会 訳・編『フィンランド・メソッド 5つの基本が学べる フィンランド国語教科書 小学4年生』経済界、2006年
- ・メルヴィ・バレ、マルック・トッリネン、リトバ・コスキパー著、北川達夫&フィンランド・メソッド普及会 訳・編『フィンランド・メソッド 5つの基本が学べる フィンランド国語教科書 小学5年生』経済界、2007年
- ・林則久「教科横断的な学習に関するカリキュラム開発～小学校～」神奈川県立総合教育センター研究収録22、89～92頁、2003年
- ・山田丈美、都築繁幸「合科的指導に対する小学校の通常の学級担任の意義」障害者教育・福祉学研究第11巻、79～88頁、2015年
- ・二五義博「算数の計算を活用した教科横断型の英語指導－小学校高学年児童を対象とした英語の数の学習を事例として－」小学校英語教育学会誌13、84～99頁、2013年
- ・鈴木一成、渡邊智紀、渡辺行野、大熊誠二「「思考力・判断力・表現力」育成に寄与する学習活動における教科横断的な視点に関する研究」研究紀要 東京学芸大学附属竹早中学校52、27～35頁、2014年
- ・松原憲治、高阪将人「資質・能力の育成を重視する教科横断的な学習としてのSTEM教育と問い」科学教育研究Vol.41No.2、150～160頁、2017年